



はじめに

いまま本州、四国、九州、奄美、沖縄にある 13 か所の国立療養所は、癩そしてハンセン病をめぐる療養施設で、いくつかの制度や名称の変更を経てきたそのもっとも古い始まりは、1909 年設置の連合府県立療養所にまで遡る。どの療養所でも、詩歌や小説、随筆や行事日誌などをまとめた総合誌といってよい逐次刊行物が発行され、療養者たちの著書も上梓されていた。それらの総数はだれも把握していないほどに膨大な量となるだろう。全貌がつかめない療養者たちの著作ではあるが、そのなかで英語など日本語以外の欧米の言語に、とりわけ 20 世紀前期の時代に翻訳された事例は、ごくわずかな数にとどまるとおもわれる。

この小文では、療養者の作品が英訳されたようすをたどるためのテキストになにがあるのかを把握するとともに、療養所において日本語で書かれた詩をふくむ作品が英語に翻訳されるとき、そこにどういった課題があらわれたのかを確認することとする。

¹ 本稿は 2013 年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト「療養所空間における 生環境 をめぐる実証研究」と同年度滋賀大学経済学部学術後援基金研究テーマ「療養所の自治活動についての実証研究」の成果の 1 つとなる、2013 年 9 月 30 日開催「詩と翻訳 ポエトリーリーディングワークショップ」での報告原稿である。

著作の長田穂波

瀬戸内海の大島に設置された療養所に生きた長田穂波は、当時の言葉でいう癩(leprosy)に罹っていたために、その島で暮らすよりほかない人生となった。もっとも彼のばあいはいわゆる強制隔離収容によって大島に来たのではなく、みずからの意思で島に渡ったとのちに回想している。穂波の生年月日は1891年10月22日、死歿の年月日は1945年12月18日である²。大島に療養所が開設された1909年に島に渡った穂波は、そののちはおそらく島からの外出は1度きりのことだっただろう。島の療養所で生活をおくった療養者たち自身が形容した「閉ざされた島」³で彼は暮らしたわけだが、しかし、彼の生は療養所の外部、そして島の外部と完全に切断されてはいなかった。思索と文筆と信仰のひとだった穂波は、島で過ごしたおよそ36年のあいだに膨大な量の文章を書いた。穂波は、彼が創設者のひとりだった大島でのキリスト教信徒団体が発行した、最大発行部数1万にもなった機関紙の現存するすべての号に寄稿し、島の外で発行された逐次刊行物にもいくつもの稿を送り⁴、そして、島外の出版社から上梓された彼の著書の数は生前に14冊ないし15冊、歿後に遺稿選集1冊にのぼった。単著の数でいえば、おそらく20世紀前期を生きた癩療養者で、穂波ほどの冊数に達したものはほかにいないとおもわれる。

穂波の著作目録は、1945年12月19日にとりおこなわれた葬儀における、霊交会会員で

² 穂波の生年月日と死歿年月日は大島で回覧された手書き手づくりの雑誌『青松』の長田穂波追悼号となった第17号(1946年1月)掲載の「弔詞」によった。

³ 大島青松園入園者自治会が編集し大島青松園入園者自治会(協和会)が「国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史」として発行した書名「閉ざされた島の昭和史」の一部(1981年発行)。

⁴ 大島のキリスト教信徒団体はキリスト教霊交会という(以下、霊交会、と略記)。霊交会の機関紙『霊交』と島内で発行された逐次刊行物『藻汐草』への穂波の寄稿については、阿部安成「長田穂波日記1936年(3) - 療養所のなかの生の痕跡」(『滋賀大学経済学部研究年報』第15巻、2008年)、『霊交』寄稿補遺と判明しているかぎりでの島外で発行された逐次刊行物への寄稿については、同「大島の生、島をめぐるレターズ - 香川県大島の療養所を場とした知の動態」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.109、2009年4月)、島外発行逐次刊行物への寄稿補遺を、同「ゆくりなくも - 国立療養所大島青松園キリスト教霊交会2009年4月・5月調査報告」(同前 No.113、2009年6月)、霊交会に残る穂波の手稿原稿については、同「長田穂波遺稿 - 死んだ穂波が遺したものは」(同前 No.129、2010年4月)を参照。

ある石本俊市による「追悼感話」でその書名と刊行年月が読みあげられたようだ⁵。そののうち、穂波の未刊行原稿に加筆して再構成のうえ刊行された、大島におけるキリスト教伝道史というべき作品である『癩院創世』(著者土谷勉、発行人木村武彦、発行 1949 年)のなかでも、穂波が「島の聖者」と讃えられる文脈で彼の著書が列挙されることとなる⁶。ただし、前者では 14 冊、後者には 13 冊の著書があがっている。おそらく後者は、前者を参照したうえで穂波の著書をならべたのだろうが、なぜか前者よりも 1 冊少なくなっている。それは前者で「自伝」と紹介された、『小さき者』が後者で欠けているのである。同書は 1931 年に高知の靈光社が発行し、その年のうちに 11 版まで売れた図書である。

ここにあらためて、穂波の全著作の書誌情報をあげよう([]に「追悼感話」に記されたそれぞれの著書の分野を引用した)⁷。

『詩集 靈魂は羽ばたく』光友社、京都、1928 年、日曜世界社、大阪、1940 年(1940 年版の復刻版が、ろばのみみ編集部(東京)が 1975 年に発行)[詩集]

『みそらの花』光友社、京都、1928 年[癩者物語]

『詩集 靈火は燃ゆる』光友社、京都、1930 年[詩集]

『光れ輝け』修養団、東京、1931 年[隨筆集]

『小さき者』靈光社、高知、1931 年[自伝]

『祈の泉』修養団高知県聯合会、高知、1932 年[詩集]

『回春の太陽』培文堂森書店、京城、1933 年[癩園物語]

『詩集 雲なき空』一粒社、名古屋、1935 年[詩集]

『小さき者の告白 砕けて結べ』穂波叢書第一輯、交野愛汗塾、大阪、1935 年[修養談]

『伸び行く者』穂波叢書第二輯、交野愛汗塾、大阪、未見

『穂波実相』日曜世界社、大阪、1938 年[隨筆集]

⁵ 葬儀席上での「追悼感話」に加筆した稿が前掲『青松』第 17 号に掲載された。ここにいう石本は穂波より若い世代の靈交会会員で 1979 年に亡くなった。

⁶ 『癩院創世』については、阿部安成「物語を解す」(『国立ハンセン病資料館研究紀要』第 4 号、2013 年 3 月)を参照。

⁷ 穂波の著書の書誌情報や所蔵については、前掲阿部「長田穂波日記 1936 年(3)」を参照。

『燃ゆる心』訳者ロイス・エリックソン、教文館、東京、1938年 [詩集(英訳)]

『神は活く』合掌パンフレット第一輯、合掌出版部、岐阜、1939年 [トラクト]

『病床その日その日』ともしび社、大阪、1941年 [闘病談]

『聖書と諸問題 創世よりの瞑想』基督教出版社、東京、1943年 [聖書研究]

『福音と歡喜(遺稿選集第一巻)』藤本正高編、聖約社、川崎、1950年

数えあげられた穂波の著書のなかで、「詩集(英訳)」としてあがっている1冊が、『燃ゆる心』である。本稿はこの1冊を軸として、思索と文筆と信仰の療養者だった長田穂波を考える試みとなる。

穂波イメージ=評

さて、ここで穂波のひとりとなりや作品をめぐる評をみておこう⁸。皓星社が刊行した『ハンセン病文学全集』全10巻の第6巻が「詩一」(2003年)にあてられ、そこに掲載された「著者紹介」で穂波は、「長田穂波(長田嘉吉)一八九一年一〇月二〇日生まれ。小学校卒。一九〇九年五月二二日、大島療養所に入所。宗教文芸誌「靈交」主宰。一九四五年一二月一八日死去」とごくかんたんにその略歴が示され、遺稿選集をふくめた著書16冊があがっている⁹。穂波の詩が収録され、彼の紹介が載る『ハンセン病文学全集』第6巻詩1の「著者紹介」にならぶ189名のうち、15冊ないし16冊という著書数は、穂波以外にはみられない。

かつて国立療養所邑久光明園や厚生省社会局に勤務した森幹郎があらわした『足跡は消えても - 人物日本ライ史』(キリスト新聞社、1973年)では、「俳句、短歌、詩をよくし、一九一四年処女詩集「靈魂は羽ばたく」から、実に十四冊の著書が発行されたが〔中略

⁸ すでに阿部安成「長田穂波の痕跡 - 療養所の生のあらわし方」(『ハンセン病市民学会年報2008』2009年)に書いたそれを行論上ここでもくりかえす。

⁹ さきに本稿であげた16冊と同一だが、『^マ創生より瞑想』は「現物は確認できていない」という。他方で「宗教書『^マ伸びゆくもの』(一九三三)」にはとくに注記がないので、現物を確認したのか。その所蔵機関など詳細は不明。なお同書による穂波紹介には誤記や不備がある。同書の「著者紹介」は執筆者不明。編集部か。

引用者による。以下同）穂波の著書十四冊はすべて戦前のもので、一般には手に入らないが、私は青松園石本俊市の好意で全部に目を通すことができ、本稿はそれらによった。比較的手に入れやすいのは戦後、遺稿集として出された「福音と歓喜」（東京都世田谷区砧町一五二 四九、聖約社発行、五十円）であろう」とみせている。ここにいう 14 冊がなにであるか個々には示されていない。ただ、すべて「戦前のもの」というのだから、さきに列挙した 16 冊から、『福音と歓喜（遺稿選集第一巻）』の 1 冊をのぞいた 15 冊のうちどれか 1 冊が欠けていたのだろう。森はまた、「宣教師によって英訳され「燃ゆる心」によって、その〔穂波の〕名は英米にまで知られるにいたった」と伝えた。

すでにみたとおり、『靈魂は羽ばたく』の刊行年は 1914 年ではない。また遺稿選集第 1 巻奥付に記された聖約社の所在地は川崎市溝ノ口局区内馬絹となっている。『燃ゆる心』の英訳者ロイスは宣教師だったのか。同書にはこうした不可思議な複数の記述がある。

長島愛生園で亡くなった歌人明石海人の伝記を執筆した療養所勤務医の内田守人による『生れざりせば - ハンセン氏病歌人群像』（春秋社、1976 年）は、「長田穂波の詩魂」と題した項をおき、そこに「大島青松園は高松市外の一孤島にある。〔中略〕この島には大正から昭和初期にかけて長田穂波というクリスチャンで神経ライの詩人が居て『靈魂は羽ばたく』という詩集は英文にまで翻訳された」と紹介され、同書に掲載された「癩文学史年表」には、「ロイス・エリクソンの英訳書、長田穂波の「靈魂は羽ばたく」が『燃ゆる心』と題し教文館より出版」と記されている。

内田は大島を訪ねたとき短歌十首を詠み、そのなかの一首が「欧文に訳さるるまで君が詩の名高くなりしを歡とせむ（長田君に）」との穂波への讃歌だった（「癩学会の折ノ大島を訪ひて」『藻汐草』第 7 巻第 3 号、1938 年 3 月）。著書が英訳された穂波を讃え、ともに喜ぼうとする内田ではあったが、穂波の経歴を記すにあたって誤りを正せなかったのである。さきにみたとおり、穂波が大島に渡ったときは、元号でいえば明治、そしてこれからみるとおり英語で発行された『燃ゆる心』の元となった穂波の著書は『みそらの花』である。内田は療養者関係者なのだから、情報が不足していたとはとうていおもえない。不思議

議な誤りだ。

癩そしてハンセン病の療養所に勤めたものたちが、そこに暮らす療養者の成果を顕彰しようと努めたものの、そこには正確さに欠けるといいうくつもの瑕疵があった。

穂波は歿後にようやくその能力が見出されたのではなく、その同時代においても、突出した作家として高い評価をうけていた。たとえば、さきにも評者として登場した内田守人は、1940年の時点で穂波を、東京全生病院の北条民雄、九州療養所の島田尺草、長島愛生園の明石海人とならべ、「癩文学の四高峰」のひとりとする、絶賛といってよい好評を与えていた（「癩文学」『真理』1940年4月号、1940年4月）。その前年1939年3月発行の『医事公論』第1390号特輯「癩の文学」に掲載された、多田貞久「思ひ出る人達（文芸に精進する癩者達）」においても、さきの島田、北条、明石に麓花冷（東京）と穂波の5名がとりあげられていた。ただし、穂波については、「文壇には未だ認められてゐないが」との補足があったのだが。

このように穂波は、その同時代においても、文芸や文学の成果をあげる療養者として称賛され、そうした賛辞が穂波の元へも届いていたのだった。たとえば、さきにみた稿「癩文学」での内田の評価が、

「真理」誌上に東京の北条、九州の尺草、長島の明石、それに穂波を加へて、日本癩者の四天王と数へてあるとの噂を承りました。

と、穂波自身が編集を担う霊交会の機関紙『霊交』にみずから記録していた（「編輯後記」『霊交』第259号、1940年6月）。しかもこのときすでに、自分以外の3者が死去していたことを穂波は知っていた。彼は、「舞台に残つたのは自分一人誠に淋しく思ひます。癩者は勉強して修養して、やゝ円熟して来ると倒されます、悲しい事であります」との感慨を明かし、つづけて、褒められたとはいえ、「また立派な教養ある人格者も多く居られますが、一身上の都合で黙して表面に出られません。四天王が癩者の偉い方面の代表では決してありません」との謙虚な慎みのある構えもみせていた。

誉め讃えられる穂波の名声は、大島やその近辺にとどまらず、そこをこえた広がりがあ

ったのだが、他方で、穂波そのひとについての記録はかならずしも充分にはゆきとどかず、彼の著書のすべてが大島でも保管されているわけではなかった。その書誌情報や所蔵情況が点検されたり、1冊だけ残る日記の内容が公開されたり¹⁰、また、喩えにあるとおり筐底からひきだされたといいうる手書き原稿が整理されたりしたのは、ようやく2005年以降のことだった。

もちろんいま大島では、かつて長田穂波という療養者がいたと知られてはいる。だが、彼の著書や原稿という造物が島にも教会にも整っていただけでなく、彼の思索や精神も十分に継承されず、存分にそれらが検討される試みもなかったようにおもふ。いうならば、穂波歿後、彼の記録は病葉^{わくらば}となって大島にあった。けれどもそれは朽ちはててはいない。その葉脈や葉身の1つひとつを修復してゆくことが、まずはわたしの仕事と考えている。

隔離施設としての療養所で信仰活動をおこない、文芸の発表にも専心し、そのうちの1冊が英語に翻訳されるまでとなったと顕彰された穂波であっても、彼の生涯や個々の作品の詳細については、よく知られるところとはなっていなかった。さきにふれた皓星社刊『ハンセン病文学全集』の第4巻(2003年)は「記録・随筆」の1冊にあてられ、そこには明石海人と北条民雄の日記が収載されていながらも、穂波のそれはなく、同書編集刊行時には、日記があることすら知られていなかっただろう。穂波の評伝や伝記も皆無といってよい¹¹。詳細は不明なままその名声ばかりが高まり、そして、やがて忘れられていった療養者といった観のある穂波である。長田というその姓をどう音読するかについて、彼からの注文もあったのだが(「編輯後記」『靈交』第231号、1938年2月)、その実、穂波自身の

¹⁰ 穂波の日記は1936年の1冊だけが残っている。その全文を前掲阿部「長田穂波日記(3)」をふくむ全4回の連載で公開した(その(1)『彦根論叢』第370号、2008年1月、その(2)同前第373号、2008年6月、その(4完)同前第375号、2008年11月)。

¹¹ 執筆者の経歴不詳、執筆の経緯不明ながら、讃岐公論社発行の逐次刊行物『讃岐公論』第41巻第2号から同巻第8号(1971年2月～同年8月)までの誌上に連載された草間潤之助による「隠れたる世界的詩人長田穂波の伝記 - 大島青松園に障害を過ごせる」がある。連載7回で中断したまま掲載がなくなった理由も不明。この連載稿の1つの典拠が穂波の『みそらの花』とおもわれる。

執着がそう強くもなく、やがては、「おさだ」なのか「ながた」なのかも、気にとめられる機会すらなくなっていった¹²。

英訳書の所在

刊行した著書の数が多さが矚目され、さらにその 1 冊が英訳されると驚愕と礼讃の的となった穂波の著書が『燃ゆる心』である。書物のかたちをみよう。

書物は、上蓋、中蓋、底がついた洋装クロス地の無双帙（ブックケース）に収まっている（本稿冒頭写真参照）。表表紙の題箋（紙のタグ）に記された外題は、「hearts aglow / Stories of Lepers / by the Inland Sea」である。書物本体も和綴じで、橙色系の装飾、題箋には「燃ゆる心」との外題。和装和綴じながら、デザインや色合いは洋風となっている。題箋と扉に記された「燃ゆる心」の 4 文字以外に本書には、漢字、ひらかな、カタカナはいっさいみえない。

和文内題用扉といえるところには、「燃ゆる心」と記されたその下に、「Printed by / Kyobunkwan, Tokyo, Japan / for the / American Mission to Lepers / 156 Fifth Avenue / New York」と、英文内題用扉の「hearts aglow / Stories of Lepers / by the Inland Sea」の下には、「HONAMI NAGATA / and / LOIS JOHNSON ERICKSON / Translator of / Kagawa's Songs from the Slums」とみえる。

これら 2 つの扉に記されたところが、本書のいわば書誌情報となる。

さて、本書は英文の図書、したがっていわゆる洋書となるのかもしれない。『広辞苑』（第 6 版）でも「狭義には、西洋の言語で著された書物」と説かれているのだから、この *Hearts Aglow* も洋書なのだろう。ただし、発行所は東京、発行元は教文館¹³、日本で発行された

¹² 穂波自身は前掲「編輯後記」に「^{おさだほなみ}長田穂波 / 斯く読むのが本当であります」と記していた。なお前掲『ハンセン病文学全集』第 4 巻の「著者紹介」で穂波は「な」行のところに配置されていた。「ながた」と読んだわけだ。

¹³ 教文館公式ホームページによると「株式会社教文館は 1885 年（明治 18 年）キリスト教の出版社・書店として創業しました」という（2013 年 9 月 21 日閲覧）。大島の霊交会教会堂図書室にも教文館発行の図書が多数ある。

書物である。宣教師やアメリカン・ミッション・トゥ・レパーズ（ひとまず米国救癩協会としておく）の会員をとおして海外へのこの書物が流通したのだろうが、はたして英と米でおなじように読まれたり広がったりしたのかは、疑問が残る。

わたしが所蔵する同書の末尾からは剥がれてしまったタグ（紙片。写真後掲）が、霊交会所蔵同書にはあって、それがいわゆる奥付となっていた。そこに記された情報を転記しよう。

Printed in Japan / 昭和十三年六月二十三日印刷 / 昭和十三年六月二十七日発行 / 燃ゆる心 / 非売品 / 訳者 ロイス・エリックソン / 東京市京橋区銀座四丁目二番地 / 発行者 松野菊太郎 / 東京市日本橋区江戸橋二ノ八松慶ビル / 印刷者 後藤真太郎 / 東京市日本橋区江戸橋二ノ八松慶ビル / 印刷所 座右宝刊行会 / 東京市京橋区銀座四丁目二番地 / 発行兼発売所 教文館

これによって本書の発行年が 1938 年とわかる。ここに穂波の名はない。奥付にしたがえば、ロイスは訳者である。またこの書籍は非売品だった。

穂波について記そうとするものがこの書を取りあげるとき、穂波の著書に『燃ゆる心』があり、それをロイスが訳して *Hearts Aglow* とした、とうけとられるのだろうが、これは穂波とロイスの共著とすべきだろう。国立国会図書館が表示する書誌情報もそうになっているし、また、のちにみるとおりその内容からしても、これは穂波の著書の日本語を英語におきかえただけの書物ではなく、それからしても *Hearts Aglow* はふたりの共著、あるいはもっといえば、穂波の著書を元としたロイスの作品としてよいかもしれない。

Kagawa's *Songs from the Slums* の英訳者として紹介されたロイス・ジョンソン・エリックソンの訳書について示そう。この英訳書を所蔵する国立国会図書館は、その書誌情報を以下のとおり示している 「タイトル *Songs from the slums : poems / by Toyohiko Kagawa ; interpretation by Lois J. Erickson ; introduction by Sherwood Eddy ; illustrations by Julian Brazelton.*」 「出版事項 Nashville, Tenn. : Cokesbury Press, [c1935]」 「個人著者標目 Kagawa, Toyohiko, 1888-1960. *Hinminkutsu nite utau.* English.

1935」。

もう1冊、ロイスと賀川をつなぐ英訳書が国立国会図書館にある 「タイトル Songs from the land of dawn.」「出版事項 [S.l.] : Friendship Press, [1956, c1949]」「個人著者 標目 Erickson, Lois Johnson. Kagawa, Toyohiko, 1888-1960.」「普通件名 Japanese poetry -- Translations into English. English poetry -- Translations from Japanese. Religious poetry, Japanese.」。

この図書は、井上謙編『らい文献目録社会編』(長島愛生園、1957年)にも収載され、所蔵は大島青松園、その内容は「大島療養所入園患者の詩及び短歌を Mrs. Lois Johnson Erickson が英訳したものである(井上)」と記されている。同目録には、大島在住者の詩をロイスが訳した、*Hearts Aglow* や *Souls Undaunted* (後述) も載っているため、それらと混同したのかもしれない。賀川の著書の翻訳なのか、大島在住者の詩を訳して載せたのか、同書については今後の課題としよう。なお同書は大島ではいまのところみつからない。

エリクソン夫妻

ロイスとはだれか。現在、大島のキリスト教霊交会の教会堂まえに、2つの石碑が立つ。1つは会創設者のひとり三宅清泉(官之治)の、もう1つがエリクソン夫妻の記念碑。この3名については、教会堂図書室にもそれぞれの肖像写真が架けられている。霊交会にとって忘れてはならないひとたちということだ。エリクソン夫妻の夫スワン・メーガス・エリクソンが宣教師、夫とともに島を訪ねた妻が、ロイス・ジョンソン・エリクソンである。

2つの碑の建立が1949年12月のこと、その3年まえ1946年10月30日に「恩師S・M・エリクソン先生召天」、その6年まえの1940年10月26日に「日米関係の険悪化によつて、エリクソン先生夫妻帰米」 こうした出来事を記す「霊交会創立以来の主なる事項」と題された年表がある。それを収載した『霊交会 創立五十周年記念誌』(笠居誠一ほか編集委員、大島青松園霊交会、1964年)は、創立記念を祝福する会内外のひとたちが寄稿した文集となった。エリクソンより洗礼を受けた信徒、彼の紙芝居やクリスマス・プレゼント

を忘れられないものたちが稿をおくって会の 50 年を言祝いだ。

大島でのキリスト教伝道史といってよい書物が、療養者の土谷勉によってまとめられ、『癩院創世』の名を与えられた。その奥付に記された発行年月日は、1949 年 5 月 25 日。土谷は「あとがき」でエリクソンについて、まず、「エリクソンさんは高松に永らく居住し、菊池寛氏作「父帰る」を読むと、エリクソンさんの処へ英語を習いに行けという台詞がある」とかたんにふれたうえで¹⁴、

日米親善が叫ばれる秋、この隠れた、しかし誰よりも日本と日本人を愛した親日家をもつともつと世間の人に知つて貰いたいからである。ミシガン州カラマゾーの重症のベットにあつて、日本語を聞いたゞけで懐しさに泣き出したエリクソンさん。ほんとに誰よりも一番日本と日本人を愛したエリクソンさんだつた。エリクソン夫人は今も尚、カラマゾー市フランクリン街の一角から、日本と日本人の為祈りつゞけておられる。

とエリクソンを同書でとりあげた理由を説き、第二次世界大戦後の時世にこの書をおき、彼の死を悼んだ。

「永遠の輝き」と題された同書最終章は「終戦の歳が明け」、さらに幾星霜かを経たところでの大島の霊交会教会堂の描写から始まる 昔ながらの陽射しが照らす教会堂礼拝堂の屋根、小鳥啼き花々咲く庭、「一点の汚れも止めぬ清浄な掃目が、人々を入口へと導いた。ドアを静かに押して礼拝堂に隣する図書室へ這入ると、鴨居に掲げてある大きな写真が目についた。和服姿の田舎の村長然とした、紛れもない三宅だつた」 さきに示した三宅の肖像写真である。

三宅を見ると長田を思い出した。長田の著した数多くの著書が、その下の本棚にぎつしり詰まつていて、神の讃歌が聞き取れた。三宅や長田を思うと、宮内〔岩太郎〕牧師の田舎の校長然とした姿が目には浮び、帰米したまゝ音信の無いエリクソン師夫妻の安否が

¹⁴ 一幕の短い戯曲のなかで「兄さん、僕はやつぱり、英語の検定をとる事にしました。数学にはええ先生がないけに」「ええやらう。やはり、エリクソンさんの所へ通ふのか」「さうしようと、思つとるんです、宣教師ぢやと月謝がいらんし」と登場（「父帰る」1917 年。ここでは『日本文学全集 28 菊池寛 / 広津和郎集』筑摩書房、1970 年、によつた）。「父帰る」は大島療養所の共楽団によって 1933 年正月興行で演じられている。

気遣われた。しかし、終戦の只ならぬ不安定の中から蘇つた一縷の希望があつた。再びエリクソン師夫妻の姿が見られるようになるのであるまいかと。

この希みが、「突然、廻り廻つて太平洋の彼方からエリクソン夫人の懐しい長文の便り」となって叶った。

「エリクソン師が重態」と知った霊交会の人びとは、大島で祈会を開き、ロイスに手紙をおくる。三宅と穂波の死を知ったロイスから手紙が来る。そののち、ロイスからのエリクソンの訃報には師の写真がともにあり、「病友はそれを額に嵌めて三宅と並べた」という。

病友は毎日其処に集つて祈会を持つに先立ちエリクソン師と三宅の写真を仰いだ。すると、慰めと励みと、慈しみと神の福音が、誰の胸にも滾々と湧上るのを覚えた。(完)

の文章をもって『癩院創世』は閉じられた。

エリクソン夫妻の記念碑建立の時期は、碑の裏面に「一九四九年クリスマス」と刻記してあるのでわかるが、教会堂図書室に掛けられた肖像写真についての記録をわたしはいまのところみていない。『癩院創世』の記述にしたがえば、その写真が霊交会に届いた時期は、エリクソン歿後そう日を経ているころとなろう。いまは、三宅とエリクソンの写真はならんではない。図書室のドアを開けてなかに入ると、正面壁面上部の左隅の方に三宅の写真、右隅の方にエリクソン夫妻の写真がある。三宅とロイスの写真は、それぞれにいつころ図書室に掲げられたのか、わからない。

エリクソン夫妻といっても、宣教師の夫についての情報はそこそこあるが、他方で妻のロイスについての記録は少ない。『癩院創世』本文では、わざわざ「註」がうたれて、エリクソンの略歴が示されている。

師は一八八一年米国ミネソタ州に生れ、ハメリン大学を卒え、一九〇五年宣教師として高松に赴任、以来三十年間香川県各地の直接伝道に従事、七ツの会堂、四ツの牧師館を建設す。その間大島療養所の為、献身的慰問伝道を行い、一九四〇年帰米、マウント・ワシントン長老教会牧師として活躍中発病、一九四六年遂に昇天さる

他方でロイスについては、さきに見たところでしか同書には登場しない。療養所に生

きたひとたちの人数をみればその男女比には偏りがあり、そこは男が多く暮らす世界だった。それにみあって、療養所をあらわす記述も男優位となっている。

訳者ロイス・ジョンソン・エリクソン

では、ロイスに目をむけよう。彼女の手紙を掲載した逐次刊行物がある¹⁵。日本救癩協会が発行した『日本 MTL』を継続前紙とする『楓の蔭』は、その第 175 号(1946 年 3 月 1 日、ガリ版)に、1945 年 12 月 26 日付のロイスの手紙の訳文を載せた。不明の宛所は、おそらく香川県高松市近辺に住む彼女の友人とおもわれる。手紙の末尾近くには、「開戦後大島の方々の前のと別な小詩集を出版したと申して下さい。出来るだけ早く数冊送ります。皆さんがそれを読まれて「日本人はこんな^{〔判読不能〕}」とは知らなかつた」と申します。こうして大島の小さな詩が日本のお友達を作つてみます。どこの国でも他国のことを虚偽に報道しましたから」と、大島の療養者への伝言があつた。すでにロイスは詩集を 2 冊訳したという。おそらく「前の」が *Hearts Aglow*(『燃ゆる心』)で、「別な小詩集」が *Souls Undaunted* を指すのだろう。

『楓の蔭』第 183 号(1946 年 12 月、活版)には、「信仰の父ノエリクソン博士逝く」と題された稿が掲載され、「終戦後、同夫人からの長文の手紙が届き、長田穂波著の「燃ゆる心」を英訳出版され非常な好評を呼んでみると伝へ、「日米両国は戦争はしたが、宗教には国境はない」と温かい同情を寄せ訪日の希望を洩らした」と伝えていた。ここにいう「長文の手紙」もまた宛所がはっきりとしない。『燃ゆる心』=*Hearts Aglow* がとりあげられているが、*Souls Undaunted* はみえない。

ロイスが英訳した *Hearts Aglow* は、大島では霊交会教会堂図書室と文化会館図書室に 1 冊ずつある。いまこの書物は、大島、熊本県立図書館内田文庫、国立ハンセン病資料館、国立国会図書館、長島愛生園本館図書室にあり、そして個人蔵として阿部ともうひとりを知っている(わたしの 1 冊は、もうひとりの所蔵者から 2 冊あるとのことでゆずりうけた)。

¹⁵ すでに前掲阿部「長田穂波遺稿」に書いたそれを行論上ここでもくりかえす。

わたしが知る範囲では、この書物はいま 8 冊の所在がわかっている。

大島の文化会館図書室にある 1 冊には、「協和会蔵書」のラベルが貼ってあり、それによるとこの本の寄贈者は穂波自身だった。霊交会図書室の 1 冊は、その帙の底と書物本体の最終見開き頁の左に穂波の蔵書印が押しあてられていた（写真後掲）。長島にある 1 冊には、帙の中蓋に「To Mr. Mitsuo Hamada / L. J. Erickson」の署名がある、ロイス自身からの寄贈本である（Mitsuo Hamada については不明。写真後掲）。

さきにもたとおり、国立国会図書館には、ロイスの英訳書である、*Hearts Aglow, Songs from the Slums, Songs from the Land of Dawn*、そして彼女の著書である、*Highways and Byways in Japan : Incidents of Daily Life in a City on the Inland Sea* (New York : F.H. Revell Co., c1929.) がある（未見）。国立国会図書館は同書の書誌情報のなかで、その「普通件名」に「日本 風俗・習慣」「キリスト教 伝道（地理区分）」「高松市」をあげている。

最近刊行された『アメリカ人女性宣教師の日本 第 2 期：大正・昭和初期編』（エディション・シナプス、2013 年）を監修し、別冊付録に解説を執筆した小檜山ルイによると、「ロイス・エリクソンについては、1881 年にヴァージニア州ウィザヴィルに生まれたこと以外、あまり情報がない」というも、「エリクソン夫妻は、1905 年にアメリカ南長老教会の宣教師として来日し、高松に赴任して香川県各地で伝道活動を展開した」とも示したので、ロイスも宣教師だったか（ただしここでの典拠は『瀨院創世』で、そこにはさきにもふれたとおりロイスの伝道活動は記されていない）¹⁶。このアメリカ南長老教会の伝道活動をつうじて、賀川とロイスとのなんらかのつながりができたようである。

ここでロイスの *Souls Undaunted* にふれておこう。わたしはこの書を、長島愛生園本館図書室でみた¹⁷。「Voices from THE CHRISTIAN POETRY CLUB at the HOSPITAL FOR LEPERS OHSHIMA, JAPAN」とも印刷された同書は、ニューヨークの The

¹⁶ 同書にはロイスの *The White Fields of Japan* (1923) が収録されている。とくに大島について記されているわけではないもよう。

¹⁷ すでに阿部安成「死んだ穂波の横顔に - 長田穂波探索」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.130、2010 年 4 月) に書いたそれを行論上ここでもくりかえす。

AMERICAN MISSION to LEPERS が出版した。発行年月日の情報が同書にはなかった¹⁸。この英訳詩集には、Hayashi、Mumei、Ozaki、Yamamoto、Handa、Kawabuchi、Kanda、Utsunomiya、Takamoto、Shirano、Kida、Yamaguchi、Taniguchi、“Shinja”、Egi、Miyuchi、Nagata、の詩が収録されている。ここには、The Christian Poetry Club at the Hospital for Lepers Oshima との名称も記されている。さきにあげた詩の作者たちが属した組織や集まりということだろうか。わたしはそれをまだ大島で確認していない。

超克の詩

数多くの著書を上梓することとなる穂波の最初の著作は詩集となった。1928年5月25日発行の『靈魂は羽ばたく』（光友社。以下『靈魂』とする）は、同年7月1日に再版が、ついで9月15日には三版が、1930年3月25日には七版が刷られる。それぞれの発行部数は不明だが、重版のようすからそここの売れゆきをみてもよいだろう。同書は1940年に日曜世界社からふたたび発行され、その版の復刻版が、1975年にろばのみみ編集部から出される。広範に読まれたと推しはかれる詩集である。

『靈魂』には、賀川豊彦が「序」を、与謝野晶子が「序に代へて」を寄せている。賀川の寄稿は、穂波とエリクソン夫妻との信仰によるつながりがあったのだろうが、与謝野については、賀川の「思召」との由。

賀川は、「この詩に於いてキリスト精神は完全に、日本の土のものとなつてゐるやうな気がする」と詩作にあらわれた穂波の信仰に感嘆し、「南風のそよぐ瀬戸内海の一孤島「大嶋」に、作者^{ながた}長田穂波君は、ペンを右手に紐で括り付けて、この詩篇を書いたかと思へば、この詩篇がヨブ記以上に、意味深いものであることを思はせられる」と、穂波をめぐる特異な環境と身体とを、作品賞讃へのいっそうの跳躍台としている。これが穂波の作品を讃えるときの一つの型となる。

¹⁸ さきに参照した小檜山の解説では同書の「出版年はアマゾンに出品された中古本の情報によった」として1948年としている。

最初私は、病人の書いたものだから、さう大したものではないだらうと思ひ乍ら、繻いたが、その音律の床しさ、ピッチの高さ、語気の強さ、神の懐に沈んだ魂の清朗さに、ワグネルの交響楽を聴くやうな気がした。

二十年間の癩病々院生活に、少しの不平等もなく、地上の穢れを離れて、パラダイスの高きに高踏する一人の天使は誠に彼である。

といった賀川の文章もさきの型の派生形であつて、汚穢であるところ世のなかに、またときにそうなっている療養所に顕現した清、真、聖として穂波とその作品が崇められるのである。

与謝野の賞讃にも、「私は第一に、そのお気の毒な御病気が機縁となつて、^{ながた}長田さんが多くの苦闘の後に、この明るくて平和な信仰生活に安住せられるに至つた」と、さきにみた型がその核に及んでいるのである。

これらの賞讃は、逆境に打ち勝ち、それを乗り越え、生き抜いた、という療養者観につながつてゆく。こうした言説を、^{うた}超克の詩と呼ぼう。

穂波の詩

Hearts Aglow=『燃ゆる心』をみるまえに、穂波にとっての詩について考える端緒を開いておこう。

『靈魂』に穂波は、4頁にわたる「はしがき」を残した。それは否定形の文で始まり、それがくりかえされる場となった。

これは審美的立脚地より産出したる芸術的作品では無い。

神の恵光の中に抱かれたる歡喜と感謝との献物であつて、詩でも歌でもない。

これは詩でない歌でない。

ではなにか。

これは逆境の底積みとなり果てて、ひとたびは全く押潰されし者が、彼の十字架より流し給へるイエス・キリストの御宝血に浴し得て、甦らされし靈魂が、新しき生命の力

に充たされて、新天新地を望みて、而も暗涙悲哭の奥より飛翔なしつゝある朝夕の羽音なのである。

ここに 超克の詩 はない。逆境を乗り越えた精神や勉勵を讃える凱歌を唄うのではなく、信仰を経て発生した「新しき生命」、穂波はそれを「新生命」あるいは「真生命」ともいった、それに感激し、それを祝福する寿歌の斉唱である。

ただし穂波は、それを心地よい調和の歌 (harmony) とは聴いていない。少なくとも彼にとっては、それは「羽音なのである」。穂波は「はしがき」で、このたぐいの喩えを多用する。

残酷きはまるサタンが築きあげたる、人間苦と言ふ深谷の牢獄の鉄扉の破れつゝある響きでもあらう。

救はれたる者の真心より怫然と湧き出でし赤裸々なる、天父の栄光を頌讚する絶叫なのである。

不遇の重石の下、失望苦悶の暗床の中、あらゆるサタンの鉄扉の堅を破つて甦れる新生命、神の子らの^{たま}靈魂の羽ばたく勇ましき響きの、到る処に高鳴り起らんことを待つ者である。

というぐあいである。書名からして、「^{たま}靈魂は羽ばたく」だった。「はしがき」の終わりに載る 12 行を引用しよう。

これは詩でない歌でない。

イエスの血の、

紅き活躍の勢ひに、

ひとたび死せる人の、

暗黒の底より、

甦り出づる、

生命の羽ばたくひゞき。

あらゆる逆境の扉は砕け、

高鳴り起てよ

光明の歌ご糸

神は、この者によりて

栄光を顕はし給はむ。……………アメン。

穂波は、世間でいう詩を示し、それを読むものたちに、ぶんぶん、ぱーんという虫の羽音か、ぱたぱた、ぱたぱたという鳥の羽音かに喩えられた響きに耳を^{もはだ}敲てよ、^{うな}唸りに耳を澄ませ、と要求したのだった。大島の療養所に、呻吟の音（drone）が鳴り始めたのである。

音を発する

穂波の文章にドローンを聴く。これはわたしの構えである。ただしこの音は、ときに強い鼓動（beat）となり（詩「兄弟よ」）

聞いて呉れ……心の耳で聞いて呉れ！

俺は言葉の綾で語り度くないよ

それは響いたら済む

音楽のやうな

音を発するいたづらは言ひたくないんだ

俺は心で聞いた

聖霊のこ糸

彼の無声の言葉を語り度いんだ

だから生命の底にうつ

心臓の鼓動で

兄弟よ……お前の心臓に知らしたい

またときに、「細いながら弱いながらノハツキリと聞ゆる」「チヨロ、チヨロと流れ初めし」

「セ、ラギ」の響きともなる。『靈魂』に収められた最初の文章（詩）の題が「セ、ラギ」。

prw

これはまた、穂波たちが集う、大島でのキリスト教信徒集団霊交会の機関紙『霊交』（1919年～1940年）のほぼ毎号に載った巻頭言の題名でもあった。穂波が長期にわたって好んだ言葉である。この『霊魂』の第1詩「セ、ラギ」には、「小誌「霊交」発刊後十五年を回顧して」との注記がある¹⁹。同紙の巻頭言を想起し、それにつけた言葉をここにも転記し、そして初の著作の、初の詩集の、その最初の頁の詩を「セ、ラギ」と命名したのだった。せせらぎの音があrawす流れは、霊交会の歩みの喩えだった。

内海孤島の別天地の小さき流れ

貧弱なるセ、ラギ

広い天地に果して

何程の反響を起し得ようぞ！

止み難き力に迫らるゝまゝに

立つる微な音の流れ

さあれ……これ救はれしものゝ

^{こころ}霊からなる^{まこと}眞のセ、ラギ………！〔詩「セ、ラギ」〕

だが、大島には小川すらない。いまも、おそらく、かつても。島にいれば、くりかえし寄せては返すさざ波を、いともかたんに耳で聴けたはずなのに、穂波はその音を喩えに用いなかった。雨のときには、島の山から道をつたって海へと流れるたまさかの川ができたのだろうか。「木の葉の下を潜りつゝ / チヨロ、チヨロと流れ初めしは」と記したのだから、そのていどの流れでもよかったのだろうか。信仰を結集する場のこれまでの歴史を確かめ、そこでの信仰の継続がなにかしらの^{ひびき}影響をもたらすかと願われるとき、大島ではふだん聴くことのないせせらぎの音が喩えに用いられたのだった。いまはここにはない音に託された未来である。

『霊魂』で穂波は、現時を記録し（詩「噫、逆境よ」「脳を病めば」「彼れの肉体」）、自

¹⁹ いまも創刊号が所在不明の『霊交』の発刊は1919年に始まるという。それから『霊魂』刊行の1928年までは9年しかない。「十五年を回顧して」の記載が誤記でなければ、霊交会創立の1914年から1928年までを15年とみなし、それを「回顧」とするの謂か。

然を描き（詩「お庭の雀」「月は美し」「新星」）、世を問い（詩「釈尊か？ 基督か？」）、あるべき世を見晴るかす（詩「第二の国よ来れ」）。それらを音として、音によってあらわそうとする構えを「はしがき」でみせはしたものの、第1詩集『靈魂』ではまだ、詩という形式にうまく乗せる言葉を穂波は手にしていなかったように見える。すでに9年まえから機関紙『靈交』の編集と発行を担い、かならず毎号になにかしらの文章を載せていた穂波だから、書く、考える、書く、考えるという作業に不慣れだったとはおもえない（もとより彼にとってそれが容易^{たやす}い作業だったというわけでもない）。『靈魂』には、ときに破調とも、あるいは調子整わずともみえる言葉の並びがみえる。このことを穂波も気にしていたとうかがえる。

「紅血^{あしほ}は躍る」と題された詩には、その冒頭に「或詩形にならつて」の注記が括弧書きされている。

衣の中に紅血が躍つてゐる

三絃の音に合はせて

快樂の街に流れ出でむものと。

x x x

衣の下の紅血が躍つてゐる

キリストと共に

十字架の上に流さんものをと。

x x x

神へか！、サタンへか！

戦闘の紅血にまみれて

生死の二途此処に全く定まる。

形にならったというだけのことはあって、言葉の調子はよい。他方で、型にはまってしまったとの評もあろう。音によっていまここにはないなにかを造形しようとした穂波の試みは始まったばかり。彼は第1詩集の最終詩を「自己改造」と題した。

「体験的告白」を編む

穂波の第2の著書は、『靈魂』発行から1か月も経たない6月15日に発行された。出版社はさきにおなじ光友社。書名は「みそらの花」(以下『花』とする)、『花』は仰々しくも、「同志社大学総長 神学博士 海老名弾正先生題字 / 京都大学病院元皮膚科部長 医学博士 松浦有志太郎先生序文 / 高松在住宣教師 神学博士 エ・エ・エリクソン先生序文 / 岡山医科大学長 医学博士 田中文雄先生跋文 / 第四区大嶋療養所 庶務係長 乙竹節石先生跋文」によって飾り立てられた(海老名は「題字」となっているが寄せられた文字は「復活」)。このときはまださきの刊行物『靈魂』が版を重ねることを確信していなかっただろうから、穂波の2冊めを売りだそうとする出版社の強い意欲が感じられる。

松浦有志太郎の「序」にも(「彼の、悲運逆境の谷底につき落とされてある多くの可憐なる兄弟姉妹達が、神の愛の救を信じ、永遠の生命をつかみ得て、あつぱれ幸福の人となりすます所、実に有り難さの極みでなくて何であらう)、エリクソンの「序」にも(「彼自ら「生ける屍」と言へる如く、こはれた彼の肉体に、斯くも多くの賜物が宿つて居るとは、何と云ふ驚く可き事実であらう)にも、超克の詩 がみえる。ただしここでは、信仰心が事態克服の力として看取されている。

エリクソンはまた、「序」において大島での祈りを、その「戦士」であり「指導者」である穂波が靈交会を組織していると伝え、ここに出版される『花』は「^{ながた}長田氏及び靈交会員の宗教的体験を、簡単とは言へ率直に著述せられたもの」で、エリクソン自身これまでもその話をそれぞれからじかに聴き、「深い感動を受けたと共にしばしば泣かされたものである」と説いた。

「地上の星篇」「天上の花篇」「こゝろの花」との三部に分かたれた『花』は、その初めての2つの篇で、穂波と靈交会会員の体験が綴られ、最後の篇で、「春うたへる」など四季折々の、そして「近くうたへる」との短歌を掲載する構成をとっている。その文体は、最後の篇が短歌という韻文であるのに対して、体験譚の篇は通常の口語文(現代文)と詩によっ

てなる。前著の「はしがき」にあたる著者自身の文章は「序詩」と題され、ここでも口語文と詩との組みあわせとなっている。

「地上の星篇」には、「一家離散遍路の旅に」「親思ふ心にまさる親心」「順礼姿で一人旅」「片意地な H、血潮に溶かさる」「彼も冷たき人の世に泣く」「生命なるイエス」の各章が配され、「天上の花篇」は、「双児の孤児」「新生せる大悪徒」「夢路にも通ふ天津国」「修道院に散る一輪の白百合」「『父』とは父とは」「炎天にイむ盲人」「屍をめぐる妙なる響り」「Kさんの懺悔と法悦」の各章よりなる。「片意地な H」とは、穂波自身をいう。

それぞれの章にその体験が展開する療養者は、順に、神田慶三、晨さん、みよ女、H(穂波)、今与、イエス、藤田進と実、島本繁馬、松永竹乃、匿名女、福富肇、宇都宮勉十郎(毒草子)、掛野為四郎、K(男)。「天上の花篇」末尾は、「斯る体験的告白は、何と読者に響くであろう。地上に萎みし哀れなる花も、十字架の血に浴して翼を生じ……、みそらの星と輝き初めるのである(完)」と閉じられた。体験を告白した療養者 14 名中、4 名が女である。療養所では女が少ないという男女比の不均衡をふまえても、ここではいくらか女の割合が少ない。

言葉の韻律

13 編 14 名の「体験的告白」から、療養所のなにかしらの実相をつかもうと試みるむきもあろうが、ここでは、文体や言葉に着目してみよう。

さきにもふれたとおり、1919 年から霊交会機関紙『霊交』を編集していた(もちろん執筆も)という彼は文章の扱いには慣れていた。「両手共不具」(S.M.Erickson「序」)、「右手にペンを括りつけてものしたる」(『花』口絵写真キャプション)、「ペンを右手に紐で括り付けて、この詩篇を書いた」(賀川豊彦「序」『靈魂』)と観察される難儀を抱えていたとはいえ、これまでも日々、文章を書いてきた穂波だった。書くという行為に不慣れではなかったことと、文体を操る術を手中に収めることとは異なる。第 1 詩集に収められた穂波の詩にはいまだ硬さが残っていた。「はしがき」も論述の文体であり、詩はそれをいくらか柔

らしくして行替えを多用したていどとの観が残った。それがこの第 2 著作『花』では、違う文体が展開している。

「体験的告白」を物語るという形式が、新しい文体を呼び込んだともいえよう。そして詩も、それは定型詩ではないものの本文とあいまって、それぞれの章で読まれるにふさわしい、もっといえば音読されるにみあった韻律でこしらえられたのである。こうした文体はとりわけ、穂波自身の「告白」を物語った「片意地な H、血潮に溶かさる」の章で顕著にみられる。

句読点で句切るもよし、そうでなくともよい。詩をふくめた穂波の文章は療養者の「体験的告白」が物語として発せられるときの調子を得たのだ。文章も詩も、である体とですます体とが、口語と文語とが入り混じってはいるが、そのことが必ずしも破調に陥る要因とはなっていない。芝居のなかの謡のように文章と詩とが一体となって、音読される告白譚となっているように見える。ここにいう「体験」とは、1 つは癡であり、1 つはそれにもとづく惨であり、1 つは信仰とその喜びである。そしてどちらかという詩という形式が、信心をあらわすときに活用されているところがある。

穂波は『花』の「序詩」で、「私がこれより物語らんと為す主意は、生命の脅威を受けてゐる人、愛の無い世界に住む人、其他、悩める人々に対して、イエスの活ける愛の尊さを証言^{あかし}して、或は慰めともならばと云ふにあります」とみせていた。また第 1 詩集『靈魂』では、「愛する同病患者を初め逆境の淵に沈める一般の兄姉に」、「尚ほ健康なる肉体と清々たる精神の所有者にも」この書物を送ると掲げていた（「はしがき」）。ここではいくつもの境界が想起されている。いわく、生命の脅威の有無、愛や悩みの有無、逆境と順境、肉体の健康と不健康、精神の清と汚、そうした二分された世界の境をこえた向こう側へ自分たちの「体験的告白」を発信するとき、音読されるように書く文体を穂波は試みた。告白を音^{おん}で伝える。他者へ語りかけるときに^{あいたい}相対の場面が想定され、そこではあたりまえのようでもある音が重視され、それはまた、あらためて内にあるものの越境する文体 という書く術となったのである。読む相手の耳を^{そはだ}敲^{たた}てさせる越境する文体は、その内側にいるも

のたちみずからがつい「閉ざされた」と形容したくなる、あるいは形容せざるを得ない療養所のなかにふさわしい書くときの技術だったとおもう。べつに言えば、療養所の1つの秩序が越境する文体に体现されたのである。

この点 生きる場の秩序が文体にあらわれる は、韻律がはっきりしている短歌に顕著だ。穂波は短歌も詠んだが、ついぞ歌集を刊行しなかった。そうした穂波にあってはめずらしく、『花』には全118首の短歌を載せている。四季のうたでは、春8首、夏31首、秋17首、冬21首と、夏好きの穂波らしい歌作のようすをあらわし、「近くうたへる」とまとめられる短歌を41首も詠んでいる。

そうしたなかで、「春うたへる」8首では、「君」(大君か?)「大君」「イエス」の語を詠む短歌がそれぞれ1首ずつ、おなじく「夏うたへる」では「大君」「大神」「父の大神」「おほ神」が、「秋うたへる」で「神の御国」が、「冬うたへる」に「神の恵みと大君の」「君」「エス」「^{ちち}天父」の語がみえる。「近くうたへる」でも、「君」(これは、あなた、の意)「神」「神」「神」「神」「イエスキリスト」「エス」「神」「エス様」「神」「神」というぐあいだ。

かくばかり騒がしき世をみそなはず / 大君いかにおぼしめすらん〔春うたへる〕

大君の幸いのるなり昨日今日 / わけて暑しとおぼえらるれば〔夏うたへる〕

あなうれし神の恵みと大君の / めぐみあふるゝ島に住む身は〔冬うたへる〕

と詠む穂波に照らすと、『花』の「こころの花」の章に載るほかの療養者は「聖神」「神」「天父」「主」の語を用いても、「大君」と詠んだものはひとりもいなかった。

穂波においては、キリスト教の神信心と天皇という現人神がいる日本の秩序とのあいだに強い違和や深刻な葛藤は、一貫してほぼなかった。だからここでも神の恵みと天皇の恵みとをともにありがたく感じられ、それを素直にあらわし得た。また、『靈魂』や『花』が出版された1928年は、新天皇裕仁の即位式がこれからおこなわれようとしているときだった。時事の話題ともいえる天皇が、和歌と称され、その出来が万葉調などとして称えられる短歌という韻文において「大君」として呼びだされたのである。5・7・5・7・7という韻律が、療養所をもふくむ日本の秩序とも呼応していたといえよう。

Hearts Aglow=『燃ゆる心』 / 『みそらの花』

ここでロイスの訳書 *Hearts Aglow* をみよう (以下 HA とする)。HA は全 9 章からなり

I. A WORD OF EXPLANATION、II. "THE NEW MAN STANDS FORTH SHINING"、
III. TWO VERSES BY KEIZO KANDA、IV. TWINS、V. LITTLE POEMS FROM
OSHIMA、VI. "THAT THE WORKS OF GOD BE MANIFEST"、VII. POEMS BY
HONAMI NAGATA、VIII. ST. SHIGEMA OF THE GAMBLING DEN.、IX. ONE LITTLE
PILGRIM OF SHIKOKU、X. LOVE'S GIFT。『花』との対応を示すと、 と が「一家離
散遍路の旅に」、 が「双児の孤児」、 と が「片意地な H、血潮に溶かさる」(ただし
は穂波の詩というだけで、『花』に掲載されているそれではない)、 が「新生せる大悪徒」、
 が「順礼姿で一人旅」となる。

ロイスによる解題をみよう HA でとりあげた物語 (stories、「体験的告白」) は、長田
穂波 (Honami Nagata) による、生き方を学ぶ最初の書物となる *Mi Sora no Hana* (Flowers
of Heaven) の一部である。穂波の『花』は七版を重ね、彼のほかの著作も広く読まれている。
穂波は大島の Poetry Club の leader であり、キリスト教信徒が大島で発行している
monthly magazine のお馴染みの寄稿者でもある HA の元となった『みそらの花』は、
その書名に漢字をあてるとすると、「美空」ではなく「御空」、べつにいえば神のおわすところ
という意味ととらえられたのだろうか。大島で発行されたクリスチャンによる月刊誌
とは『霊交』を指していよう。穂波が指導あるいは主宰したという Poetry Club については、
大島にいくつかの短歌や俳句の会はあったのだが、それがなにかがわからない。

ロイスは、『花』で披露された物語を英語におきかえるにあたって、いっさいの制限を設
けず、また、情景を鮮やかに伝えるためのいくつかの説明や描写もくわえたという。文体
をめぐるのは、ロイスのそれが混ざってしまったものの、ただし、できるかぎり、穂波の
「体験的告白」は彼の言葉のとおりにあらわそうとしたとのこと。HA に挿入された詩につ
いては、the little Christian magazine から (おそらくは『霊交』からなのだろうが、元の

詩を確認できなかった) 転載したという。ただし、著者の精神にあらわれた美しい想像力を作品からとりだして、それを読者のところに届けるためには、元の詩にあった表現形式を改変することを厭わなかったとのこと。

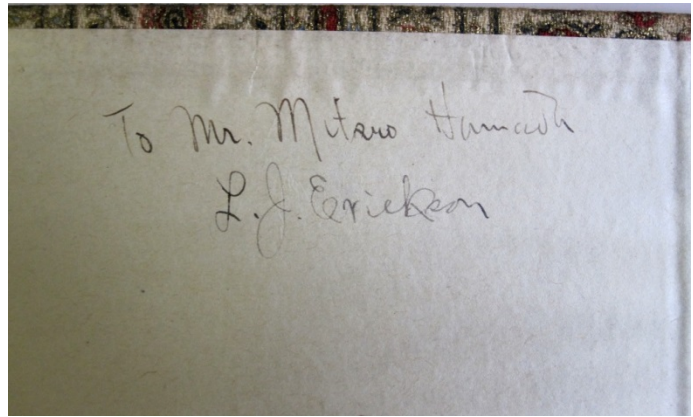
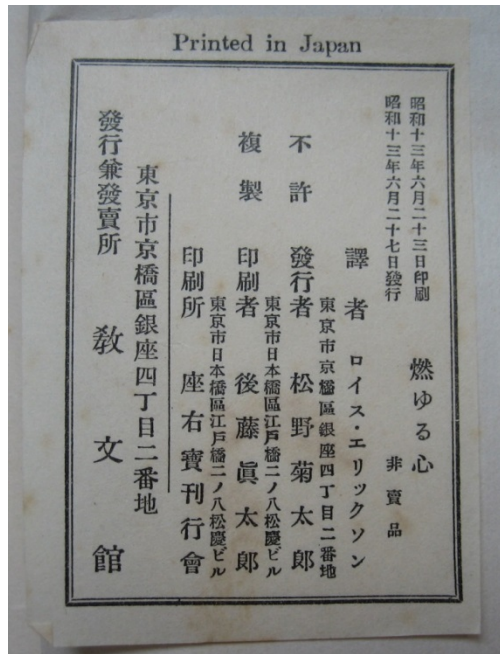
さきに、HA を穂波との共著というよりもロイスの作品とみてよいかもかもしれないと述べた根拠は、このように彼女自身が示した改変にあった。HA は、その構成においても、文体をめぐっても、いわばロイスの手が深く入り、原本である『花』に忠実な翻訳とはいえない怖れがあるのだ(わたしはそれが欠陥だといっているのではない)。

他方で、穂波の「体験的告白」をおいた HA は、「神の御業顕る」との章題がつけられたうえで、「穂波自身による物語の忠実な翻訳」と注記されていた。では、穂波の音や韻律はどのように翻訳されたか、あるいは、できなかったのか。これが HA を読むときの 1 つの論点となる。

穂波は、彼自身が『花』に記したところでは、「彼の頭脳は学校時代〔小学時代〕より独特の能力を発揮して、級中に於ても常に優等の成績を納め得た」ほどだったという。だがおそらく、その学歴と療養所の環境をふまえれば、英文をその韻律において読むことはできなかつたらうと推察する。ロイスの書物もそこに掲載された詩も、穂波には声に出して読むことができなかつた、音や韻律としてとらえることができなかつたとおもう。そしてこの点において、わたしの能力も穂波とおなじだ。

穂波が『花』で音と韻律であらわした 越境する文体 を、ロイスはとらえたか、それを HA に埋めこむことができたのか。

本稿では、作者当人にも読めない詩が翻訳されるようすを、それにかかわるテキストをできるかぎり集め、それらをもとにたどり、原著者と翻訳者とのあいだにあらわれた文体をめぐる課題をとりあげてみた。本稿冒頭に掲げた作業の目的をひとまず果たしたところで、ポエトリーリーディングワークショップにのぞみ、「リーディング」というエクササイズを試みよう。



(上) ロイスの署名 (長島愛生園本館図書室所蔵 HA)

(左) 奥付にあたるタグ (霊交会所蔵 HA)

(下) 帙底の穂波蔵書印 (霊交会所蔵 HA)



〔2013年10月1日追記〕

「詩と翻訳」と題されたポエトリーリーディングワークショップは、有意義なディスカッションの場となった。

ロイス・エリクソンが英訳した長田穂波の詩は、キャロル・ヘイズによって朗読された。穂波の詩が、しかもその翻訳された英詩の朗読は、おそらくこれが初めてのこととなっただろう。明朝体のようにはっきりと詩を読むキャロルの声が、穂波とロイスによる詩を再生した。キャロルともうひとりの出席者バーバラ・ハートリーから、ロイスの英訳詩は、hymn のようだ、modern な感じがしないとの教示があった。音のうえでもロイスは穂波の詩の調べをうまく英語に翻訳したように、わたしはうけとめた。

ディスカッサント役のエリス俊子からのコメントには奮起させられた。一般に「越境」という概念やその語を使った論述の意義を認めながらも、他方で、その語が不用意に登場する議論に辟易しているとの慨嘆を滲ませながら、越境し切ってしまっは意味がなく、その境界線上の様相をとらえなければならない、といった趣旨の発言があった。

これにはまったく同意するところで、穂波たちの言葉も療養所の、島の境をこえた向こう側に着床したわけではない。ここにいう境界はもちろん目にみえる線や面ではなく、思念上の現象である（もっとも大島のばあい、海という面は目にみえて、また接合の場であったり通路であったりする境界なのだが）。いくらか抽象度の高い方をすれば、この境界上の、あるいは線上の、面上の様相をとらえることが重要だとおもった。本稿で 越境する文体 とあらわした言葉は、線上の文体 とでもいいかえた方がよいかもしれない。

エリスはまた、翻訳とは原作のそのままをあらわすのではなく、原作に閉じ込められていたものを解放する作業だ、という趣旨のことを述べた。これもそのとおりで、もっと敷衍すれば、おなじ日本語であっても、たとえば穂波の文章を読み理解するとは、そこに籠っているなにかを解き放つことなのだろう。さらには、歴史学研究者が史料と呼ぶ過去のテキストの扱いも、そこに記されていることがらをそのまま引きだして歴史を再構成しておけばよいのではなく、そこに潜んでいるなにかをひっぱりだすことが歴史家に課せられ

た職分なのだとおもう。「潜んでいる」とはどういうことか、「ひっぱりだす」とはなにをどのようにすることなのか、そして「なにか」とはなにか、をきちんと述べなくてはならないが、それはまたいずれ、それこそ史料に即して論述することとしよう。

ディスカッションでは、萩原朔太郎の詩と身体性も論点として示された。穂波の文章も彼の身体と切り離せない。べつにいえば、身体性の強い文章を穂波は書いた。最初の著作『靈魂は羽ばたく』に収められた詩の題が、「新しき血滴」「紅血は躍る」「脳を病めば」であることはさきにみた。くわえて、彼の執筆に着目する観察者たちは、「ペンを右手に紐で括り付けて」(賀川豊彦「序」『靈魂は羽ばたく』)「彼は両手共不具」(S.M.Erickson「序」『みそらの花』)「著者が右手にペンを括りつけてものしたる筆蹟」(口絵キャプション『みそらの花』)とくりかえし、彼のペンを持つ手をみて、そのようすを伝えた。穂波の文章にあらわれる身体性も、彼の 越境する文体 あるいは 線上の文体 に籠っている。穂波の文体はようやく議論され始めたばかりである。